

Early-onset cardiac dysfunction following allogeneic haematopoietic stem cell transplantation

森山, 祥平

<https://hdl.handle.net/2324/6796076>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : © Author(s) (or their employer(s)) 2022.

(別紙様式2)

氏名	森山 祥平
論文名	Early-onset cardiac dysfunction following allogeneic haematopoietic stem cell transplantation
論文調査委員	主査 九州大学 教授 久場 敬司 副査 九州大学 教授 前田 高宏 副査 九州大学 教授 大賀 正一

論文審査の結果の要旨

【背景】同種造血幹細胞移植により造血器腫瘍の予後は改善されたが、重篤な有害事象としてがん治療関連心機能障害 (CTRCD) がある。CTRCDは同種造血幹細胞移植後早期より発症しうるが、早期発症CTRCDの臨床的意味は明らかでない。我々は、同種造血幹細胞移植レシピエントにおける早期発症のCTRCD発症の予測因子と、CTRCDの予後へ与える影響について検討した。

【方法】申請者らは九州大学病院にて2007年から2018年に同種造血幹細胞移植を施行した136人の造血器腫瘍患者を対象とし、早期発症CTRCDに関する後ろ向き解析を行い、予測因子について検討した。また、CTRCDの患者予後に与える影響について検討した。早期発症CTRCDは移植後100日以内の左室駆出率の10%以上かつ53%以下への減少と定義した。

【結果】早期発症CTRCDは23人/136人 (17%) に見られ、移植からCTRCD診断までの期間は中央値24 [9-35] 日であった。追跡期間中央値は347 [132-1268] 日であった。多変量ロジスティック回帰解析において累積ドキシソルビシン投与量 (10 mg/m²毎)、急性移植片対宿主病 (グレード毎) は急性発症CTRCDの独立した予測因子であった (各オッズ比 [95%信頼区間], 1.04 [1.00-1.07], p=0.032, 1.87 [1.19-2.95], p=0.004)。早期発症CTRCDは、原疾患、移植時の寛解状態、移植ソースと独立して、同種造血幹細胞移植における全死亡・原病死と有意に関連していた (各ハザード比 [95%信頼区間], 1.98 [1.11-3.52]), p=0.016, 2.96 [1.40-6.29], p=0.005)。

【結論】急性移植片対宿主病の重症度と高容量アントラサイクリ投与量は早期発症CTRCDの予測因子であった。同種造血幹細胞移植後の早期発症CTRCDは造血器腫瘍患者の予後規定因子である。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士 (医学) の学位に値すると認める。